

じて齋藤内閣の成立を視る至れり。

西園寺公が政民黨の黨首に大命降下を奏薦せずして政黨に籍を有せざる齋藤大將に大命降下を奏薦したるは同公が政黨政治の積弊を痛感し、政黨内閣は到底曠古の此一大國難に處するの能力なきことを自覺したるものと認定するを至當とすべし。

是れ即ち吾人の主張たる既成政黨の積弊打破に第一步を印したるものにして、聊が慰するに足るものもあるも、齋藤内閣の内容を検討するに、政民兩黨を踏臺とせる一種の政黨聯立内閣に過ぎずして、吾人の主張とは大なる逕庭あり。

齋藤内閣の主義政綱の未だ具體的に發表を觀ざる今日に於ては、之に對する批判は暫く之を避け、其推移を靜觀せむとす。然れども内閣の基礎及閣員の人選に依つて之を觀るに、同内閣に多大の希望を繋ぎ得ざることは今より之を推定するに難らざるなり。齋藤内閣に次で來るべき内閣が再び既成政黨の一に歸するの日再現せむか、從來の醜態を再演すべきは火を賭るよりも明なるを以て、吾人は一層渾身の勇を揮つて本會の結束發展に力を盡し、以て本會設立の主旨貫徹を期せむとす。

齋藤首相に對する進言 昭和八年八月廿三日

總裁 田 中 國 重

齋藤内閣が近時兩政黨總裁の入閣を遂げ、若くは兩政黨との國策協定に進まんとしつゝあることは、我國政治の最大病根たる既成政黨の積弊を打破し、政治界を淨化廓清して非常時日本の進路を誤まらじめないと云ふ明倫會の主張に對し、反對の行き方であることは、本誌巻頭の主張に掲げた通りである。本會總裁田中大將は深く之に觀る處あり、此政界の中心問題に對して一石を投じ、一方には齋藤首相の反省を促すと共に、他方には國民の注意を喚起するため、本會幹事渡邊陸軍中將、同匠差海軍少將を帶同して、八月二十二日午前九時齋藤首相と會見し、大約次の意味の進言をなした。

一、我邦に於ける政黨政治の極端なる積弊は痛く民心を激昂せしめ、爲めに政黨は國民の怨府となり、遂に霹靂一聲、五・一五事件の爆發を來して滿天下を震驚せしめたり。其結果、大養政友會内閣は崩壊し、政權は政黨を素通りして大命は黨人以外の閣下に降下し、彼等の持論たる憲政常道に依る政權の受接は全然否認せらるゝに至れり。是れ帝國憲法の精神に合致するの當然の歸結なりと認む。

二、大命一度閣下に降下するや、吾人國民は多大の期待を以て内閣の成立を迎へたるに豈に圖らん、内閣は其基礎を國民の蛇蝎視する政黨に置き、黨人乃至同系統人を以て閣員に充當せられたるの一事は全く吾人の期待を裏切りたるものにして、吾人は失望の念禁じ難きものありき。雖然當時の狀勢上萬已むを得ざるものとして我明倫會は現内閣を支援し、曠古の非常時局を突破するの方針の下に其行動を繼續して今日に及べり。

三、現内閣は組閣早々閣僚間の軋蹶を生じたるを端緒とし、高橋藏相の隱退問題を繞つて政友會は倒閣運動に狂